新板
繪入

# 老子形氣　五

へ 13
2730
5

老子形気巻之五

鞠乃精の事

秋きぬと目には五穀乃登りを見耳には砧の音信と菊も籬の八重かさねの衣もやさしや風乃肌にむきかはりける田家の人あれまわりて酒宴など楽を催ふにも是あらんまゝこゝの秋社といふとその年のなりはひをと祝あり菊荒乃年ゟ十日五十六夜九月の明りにし限なきのものあくまでやかれにつゝ又其なくよい姿おのこれ来りあひ互に顔見合せ

ときは姫男が日ごろにきゝおよびしとてかの
かんだ殿ぞうく平人の子ぬしにありし由にまで
じ仕ふ人もなくてあわふ不器用さよと君
けるは小人が日あやしめあふとて路頭に銭は
おりふし手紬のまゝて去りの上見をやひ今こ
也先き人目秋驕倣よくかくてしれぬしきふ
まくられどもんは鄙しき踏腹のごとく智薫を
しえ智者ふ似かしぬ人に至ても顔がら
ふて人情数ふ及ぞとしてたゞ時として嘉を
交てもんすを通せしは何げなりける狼人と称ふ

今迄ゝある時はいつまでも真実らしく云ひに
花を咲せ猿猴一度ならず退てと佗敷のごとく
仙鎚ふて世間からうたはまれぬの本見
篤尻をと世界よこれ独り好りの上にも
といふ病おこりて門松の数かさなわれば
貝殻のごとしひ残されがたくのごとく脱く病
み合味をせしうちもの思人とても知と愚
との言を謀叛人と思れ知者今日除言にて
て人情好ふ仙人のそぐひは思人の毒舌して
凡皆いやしきは自貴しといふ及きぬ

あやつりのことし　私此一つの仮喩しるべを
おもひたて彼のしな〳〵まさ〴〵にして男大ふ
感じさんく彦入る御伽骨髄に徹てる
やくし絶るにいましき初手のかく言愛ぬ
安しまれは第是を生気安否乃聖人なくめ
と再条紙首しけれいやことよそれいきもる
き作取る抑それ安くは人にあくる鶴の精
なり称まりとやくのなきよりなれて流
ろけとおらるるれ者業の身多るるも云なさ
ら貴人なる位の御手をも婦女のれ郎のや

まりれもりくすり也是故なきにあらはれ他の技
芸并芸は我げなり能して人の好すをおもふを
務るへの様ひよるでもこれ務事は歓と自分
務付る人も負なれ人の負を取らは人の道は
よんてふを同し我さそれらはうしろ出くてその
場に当て所作至まよりん気安定なりくざれど
芸もんにまかせは故に路なし至不残次く
人にまいらせんと思ひ人も道き技通ゆんするを
不好これ手に好居ふと剛むそりては所ん正
しくといふ始なれども手前は我流すも佞人

柔懦迷佪して人がくだらぬ世を歎き居る
者は真とは是等の人は我藝の罪人なり世上
の人も此者の本意を以て今日の所務を其職
しても人に憂せられ人の害になられども人に
氣を迎へ疎むことなく一寸の間合も善は
こゝろ男の日傲やされも行の性靈し甚しも
世の人弱きは強を制するといふ弱き決
してされんてされが所を發明の根と主意とする
ゆへ人を見下し其を言乏れる發明さるわ
與え經れ又は害を誤て迷惑するに及ぶ事なり

弱く柔なる中からこそたけ出ば堅くの
は出ぬことなりけし未すでに筆までは
時ゝ人の舎物も如相やうるなりしも附
ては岩を穿板鉄を貫くほどの気力がはり
今行を成す便にし猪の歯もえ堅かれ
堅剛の如くと見れとめれど却て弱きうぐれ
氣力なし其端某が所の上にて此道理を
悟りよくし柔和なるうらぶひとめ身するを本
少一つを是は筆乃生める附て立心て
から任和神じや弱しやと終に切れて弱を

そこらに扨かくのごとくいふに附ては武士の先陣に
至一番鑓を合せたるものは不了簡にておのれに旋るも
あるべしさりながら是は今の浮世の治まる乃
んぬるなり先陣などの一大事はさし迫て平生
附合友同士とても信実おもこれ第一とすべき事な
は然るにちかごろ板を続といふ気象のなくして人合る
乃道にては世の風俗をも見るふる事にしよふ
蜜ることを縦しからしも何事にも称よろしのき
時と後に向て計を出しは卑怯の人々なり
ふるゝしき人々しかけまれと称し不思議なる



御目にかゝり見たき教訓を取り又あはれしき
讒言浅述てわと東西に別れぬ
する子發明の事　附　傷弘祢同善
二人連立て奥州へ下るものの有けり男
ありしねた親もそ山へさんとなく坪の庭で
踏分てたきなるにぞつゝもりなきみて一ツ残し
て川を渡るものありける川あまり深く小
便を志けるが間白粧面生は無天了畜る奴
と呵るを二人たまりかね罵り業じこれもぞ
言ふに逃させるまでいざ問んものとまでする子浅

呼かけあらくの事を尋るに馬子が曰何の子
細のあるへき我ま世の中乃ゑ給をうんなには今様乃
家へハ今はやりかけの節利方の好事げな白く夭
吹付追風て帆ば揚ることく引返不理屈ハ
てもんてはむ乃ようゐ弱候まで添て操りふて
引ッ違し身の下れあすけれどおる男もも御数
明乃二方もいふてまるし貧乏人なれ仕とし
も何といふても世話より生れぬ先の継縁
定め利根も発明も智恵も器量も陰所乃
りくらむなしく君が秘もて終るし無様



天も今様ては扨くは擬する事をやるて嫌結み
ひざかまへの不仕合あるそのもの請て入てまわれ
家とそれより嫌の福祢なるへし、さしく今
嫌るも陸よあかりて不便世渡聟養取に
も如へきふ水沢山ながれ川中へ多く蓋をいふと
無天流とてあるゆへしやとりて主様今も御所と
く面白下賤の物ては一始し男かれもりく結
壓直しといへてる子が曰前は何人それそれ
結でいつ一人が白き男かるは我職自らハ儒者道
とて言ふる子が曰あらくハ神儒仏道の宗とする

経文の不随関係ゆへしといへども二人共て左右
大切乃事なる中の語猥(えろし)にならずおりひまなし
よしなき事を書き文情の通せざるべき義あり
或は不の旧記(きうせき)見えくらん沢(つけ)おかしくそれにて
きうゆかりしやといへども馬(まご)陶冷笑(みかつらひ)しんかくも
人をおかしふるとも曲森(せまき)飄(ひょうひ)顧らしもしかし文立
とゆかり基耳(みゝじ)学文不見へあり一口高ひ論ん
可笑(をかしく)とする塩(たゝ)へ入りし粋道(こち)といふすら踏歩より
衛(つい)の(ぞう)のこと人あるの聖人の存するやうずん
は立匿らざるの意なりして道を学ぶ折扱処道(ずゝ)



の字義和訓にこだはりて待るは既の血をいふ
ませて人の所なるざるくさとを血乃ち経ら
ぬ所なきといふ義に丸てんげく扱道といふ
も太極(たいきょく)といふも無極(ぶ)といふも皆ひとつし天地
いまだ開ざる時發もなく形(かたち)もなく陰陽の
別ちも一渾(ひとくるま)然として何ともあれぬ時をさして
無極といふ其を世極なるゆへわ自(おのずか)ら動き出
て陽気といふその形(わかち)より絶(さく)んは木(き)の實(み)と花
中に埋みし絶と芽(め)を出すがごとし動(うご)く事も
きりなく又静なるものを生は静なる不陰氣

なれば是で先陰陽二儀といふより立たるの二気の
互にあひまじはりわざはひして又火水木金
土の五行生じ此陰陽五行めぐりめぐれて
止事なきこと時計のごとくにして春夏秋冬
のにつ乃時を司る是れ陽の徳を名付けて
乾といひ陰の徳を名付て坤といふ其乾坤
五行の氣凝り精しくぬなるその合結びて乾は
男坤は女此二の交り感じてまた陰と萬
物を生じ又陰陽五行の純粋乃氣を得
て形を受けるものは人となる濁る氣を受て



生ずるものは禽獣草木いろいろのものとなる是
までは造化といふものにて人も萬物も皆陰
と陽とより成出るものにして物それぞれに形を稟てより
人は男女と別れて感じて又人を生じ
鳥は雌雄交りて又鳥を生じ獣は牝牡
感じてまた獣を生ず是を形化といふ也
天もなく地もなくしてより聖人といふ
出て君臣父子夫婦兄弟朋友乃五倫を立仁
義礼智信の五常を定めたまふは天下の道を
は一身に行ひ是を解き氣を論じ小人を去

子に入邪を識て正統元のごとく法度を立
士農工商おのおの安堵する事をなさしめむ
との深き聖人乃教万世の鑑といへども根本
はきはこれより外なし賢者学者といへども生れ
ながら発明せし工夫を書顕て一日毎に六
ケ度ありけるものなり神代は国常立尊元
く造化の始として天神地神の間に陰陽を
分の目りを今日人の身は上統備用ひ譬喩
ていふときはその也伊弉諾尊とやいふも今の人間乃
ごとく斯くも名は付る時の事なれば神代の



巻に伊弉諾尊伊弉冊尊天の浮橋の上に立
せ玉ひて共に計ひて曰底下に豈国なからんやと
のたまひてすなはち天の瓊矛を以て指下て探
りしかば是に滄溟を獲き其矛の滴瀝の
凝て一ッの嶋となれりこれを名付て磤馭盧
嶋といふ是も造化の運にして今日人間の初
まりの所は天味合に備用て舎人親王書紀
へ入りの道これを字面に拘はりて橋の上なりといへ
後へする経におもむく神道の正理を失ひその
あやは神道闕疑編といふ書のごとくなれども

なき事といひもせまじて神書は和訓にて
然らばはなはだしく俗にくだりては和訓に委
しき人云ふ雅し称和訓を以て解すると
事といふ文字は字なし事と云和語にて
天地事の和訓を火凝なり火と陽の陰陽気
乃凝りたるを事てといふ義しとこゝろ得よと云
も月と凝結の義にて自然と生れ成出る故
いふ神書を漢字にて書するとは始めて文字
といふものなくして漢字を仮名とは
是故にぬりのは文字まげたり理を解する

ゆへ解とて是も武具に用ゐて事と思ひ神代の
雅治の唐人まで皆ひなり又天地浮橋
哉りけるか太古の所見を吟味して自然の
也和訓によりては字面の文になて世は神代の
古天地未割といふより下数十所字出来
書中所々に見ゆるれども漢土の事にして
我名乃ことあるは是見て和訓を主とす
るを譬へし神も理解し是をは混沌
莫る出土煮るといふ造化の始めにて
伝ずして国の成出る意故にこゝら神んと

せかうひらまゝは遅（どろ）も濁（にごり）も千（ひ）かくまう也
さひらまゝは沙（する）も干翫（ひかひ）てといひすしこれも
乃成出婚とてんかへ次すれ大戸之道（おとのぢ）尊大
苫邊（とまべ）の尊これも思ひわと家わりれんで家（がく）室を成
組なうちを巫をなし苫を背（よき）て屋根とするの
義を称みくは是等（ら）は玉は皆氣味合ふて令
偕ふいよ二て稼いきの場（ぞ）し神武の巻すわ
合く人眺めしく解（とき）出し祢を祈（いの）りて河を治
といふ大法を立はしめて笑法く学者範言（くさな）り
て修世すなりわく何は傳彼（それ）と秘（ひ）事也会の



何は大切のこと囂嘩（ゆうまうく）むつかしくなるゆゑその
也上古は君臣建（そて）て下賤治てのちひかしに民（たみ）を
定て上なる人を崇（みな）せて上下みだりひだらずなく
ねがひで萬民をあまくいふ神儒（じゅ）も是より
おこ道といふも川といふ也是まじしと授るを
いへる人を太に教（かとろ）き法術（しゅう）を芳たりし師
を守そく教（きへ）といふそのるんで道明（わきまへ）なく凡
人世間（すな）ろれ多歎ふかくしきれを去ず愛
すゆしき学文より才也されどもこの師
と称（しょう）すべきへ今はなかしむかしは天子まうき

命せられ国民をおさむといへども所生路ひあつかひて
なほ自ら尊く学を貴し今は唐人の医
人その子ども家職を失ひ人の師となりて命
をたもつ家業とするゆへ人も皆ひ躾もなくろ
りすく卑劣野人の旗に至て是習てせむと
学者拾豆がしくいつれも七八人志て其子
の兼を蹴ろと見ゆる所あるも是て所るの
たゞ世をせむとまぬ趣して天下国家の治法は
大なり以上の事にして浪人風情の世話焼ふ
あるは夫はみな道に入ては至道に死すれ

こりたる意なるべきに今は佛法のおしへとて佛
法は釈迦にはじまる釈迦は天竺に生れ天竺
は西戎とて夷のゑびすなり況や夷狄の法
にて国の風俗にして君子人の為にあらず
故に夷は人にして人にあらざるなれば皆その
ゑびすとの文字もけだもののまがへたる亀
蛮此蛮は虫にしたがひ狄は犬にしたがふ
乃類是也故に渡来しては道にあらぬ也と
しき秋なるを神明も仏の穢を忌給ふ
倭姫世記に見へたり故に大嘗会御神事二年

日のうちに仏具売代出すより代禁じ給ひ
お家坊主は洛中往来を停止あるもありけの
けり送をきゝへ其上の羽風なるゆゑ絶えし佛
法の繁昌演べ端くまでもかざりなく今は天
下の道具と成くちて破おれども佛寺に縁なき
ものは生活て所を定めなく死して身を並
変ずし神仏水波の隔なんぞ云て西説習合
以痛る更症氣るも困といふ極るなり併為
の神職人といへども宗旨改おれども仏法の階光
ふ訳らぬものなし是も天命に叶すといへ



天竺へ渇んおくハ外ふことなしいめし人の儒
者神道する今当世のとりおハすれども浄法師ふ
同じ外様して実ゟ観世音を叶せ事は
儲けりや御銀と御節を付て個りんりのを
とりて家へお家一人も付まわり刹り物經あらく
取りぬ何と大聖出家の流生涯渡廣大言るは
そがくしと杉よりてやるまく白佛の瓶来
あく天上ふめて中入魚しといふで出家うちうるいつき
柳仏ト壱位不滅水に入て濡ハ火に入て焼ず須
彌の四洲は松わろり天ト埏窄玉色欲慶地大鳳猫

こゝろよまで見んざりけるおほく知ざる事なく輪廻
果のことわりをなげきさ三途八難の悪趣を遁
しめ給ひ又五逆十悪乃罪ありとも懺悔に
救ひとり極楽無比の楽しみをうけしめむと
説佛も衆生を興されて大慈大悲を外道化導の
為に西方より震旦人の国といへるは孔子
は光浄菩薩の化身老子は迦葉菩薩乃化
身なれば聖人といふも佛なり［此説甚空言出家とつくるも信ずるた］
きうぼとつひし［事聞異と］いふ書の跋にみえたり又我国も葦原のむかし
すなはち大日乃文をあらはして始より仏法乃国也



故に天照大神を大日孁貴とも大日といふ文
字をもちゐさせ給ひて大日如来の化身なる事
證しるし給へり神道玄々集にも天神
宮の御姿を大日如来にうつして又八幡を
釈迦如来の化身とす卯月八日に降誕せられ二月十
五日に薨御し薩摩の国の正八幡乃いはれを
晴て知べし又或書に延暦元年五月四日八幡は
託宣ありて我名は大自在王菩薩とも見へたり
と止むともおほくいふて我國の是貴くいはれ
皆方便説とて老叟老母乃そうしたるは仏の

梵意にわしは方便とりて字はたむけたてゞ
て左讀字ありて附會る理を付て無躰な嘔塭の
耳の穴へ入語ありして仏をすゝめ込ぬばかり
也され人は高人の安賣乃札賊よりも重玄の
多ひ事なり是は天竺に無稽の下品にて
人乃ふんも甚され儀しそれ也地獄極楽の外
利欲でおすひ付語にせしをの心佛の姿も裸
身に纏垂たる語なりもを祖ぬきしもなり
湯ぬぎしもなりて衣裳袈裟を着用しる
容貌なきも天竺は大熱國ゆへぞ宮中も裸

も日本の正月はのごとしといへば あくし衣装
附にからぬ也しかし世上の風俗に依て佛躰を
作りそめし物なれ右のごとし扨佛も躰のまゝ
は釈迦如来げりふて其かおけれ神道と同
意にして名を変て形勝なし天地の五行の神
陀は表しゐりのなり西方の弥陀東方乃
藥師中央の大日といふの類是也西方の金徳
に弥陀は現しゐれは時を取てを秋なり秋は方
物威施の終り故に人も死して一生は終りなれ
西方殺金を以て弥陀の浄土と云又弥陀を読

仏の中にて功徳ありとする事は文乃金像の仏として水火木金土の徳をうけ絶て画像乃腑と見る事神代国常立尊は一元水徳の神なれども天御中主尊とも同じ五行金徳の神と同一の尊也故に弥陀の名号は一気万象を了して仏心乃及ぶ感通きの云一つの月の海にも川にも桶にも池にも影をうつさゞる事なし金剛光明の至らぬ隈もなしと称美す又一体の阿弥陀の賛に曰汝は四十八願あり我は一願もなしと天晴大願中といふべし　経文は皆唐人の作りおきし



天竺の文字僅二千字今の梵字是なり我朝のいろはのごとくにて天竺にては何もかも是をもって叙りしに後漢の明帝の代に始て仏法をわたし経文もまれ大夏国の文字なれど中華の人は是をしらざれば文学乃儒者に仰て翻訳せしむ依ん経とは四夷推て事多き凡事也盗ていわく光の所葉陀とかいう來朝し江戸小川海邊にて積織宮を見て

おゞてやいでおいでぽくといでいづくとあびまえ
びまんづでおぞくつまん

ゆゑにいひしは日本人に通せざれとて維摩ん
草子ふみのきき聖意をみて横経にくすして
よことそこし然からしこに来られ
荘子読なくましられんみて天竺につてゐぞ
まんを逸へおて来て右通せざる由へ誰わかるをを
也仏書は元是をいつて理を本づけるす荘子乃
字のごとしとて荘子をとらずふりして楽しその
ゆへ仏書と荘子とハ同意同文多し老子荘の代
に云祖といふ其のおて之を解氣を論ずる事傳
にまかれくしく神の機め化を知といふ才易に



ひとしく遊ぶ言上になうて一時にして滅より
も名が殺くる類に不多大風を度をまて紀ぬ
すべてとくえひろげさ列無別法己心の
弥陀唯心浄土に佛性と理性を表せる事明也
釈迦も教外別伝不立文字と説て迦葉微笑
の時よりて一拈の方便なし禅禄に三世の諸仏
是滞蜜一代乃蔵経皆破故紙といふ翁の言
代より列り円充地りの祖師たまれ一釈迦の涎
を舐はる同じ事なりにて宗と瘦我慢を云
出し人よ笑ひの種代わどうし吾人を却の道

ものとすれバ蟻ともしらぬ一休和尚ハ一に淫義
に一代乃守なぞるも食(めし)とけなり家業(かぎやう)をよく
し一杯呑(のん)で寝(ね)るも是則極楽といはれしが
延寿(えんじゆ)の元なり天道は無為にして人間も
草木も万事平(ひら)一面にそれ〳〵の持前(もちまへ)なりに
生長せしむるは何の道無法と一流づゝの纔(わづか)
にかゝるをこれが元さするに合ぬと弦(ひぢ)を
撓(うま)へ諸ひ世界に氣ぢからの枝を曲て節となり
それをむりにすか桃に梅乃花を咲(さか)せども徒(いたづら)の
乃接木(つぎき)するゆへ生れたゆゑ花が咲(さく)なれば大道に

無為自然の風俗が立てこそ世人皆酔るも
其糟(かす)を食ひ世人濁る所へ其泥(どろ)を濁らし
て世とともに推(おし)うつるのこそ真人まことゝいふべし
是は婦男女かしら我が身のあらいばれも好(このむ)変
に任(まか)せてれ我はいとむつかしとて皺(むち)を揚(わげ)
る我ものなくて老て又いそ事をあらば

老子形氣巻五大尾

古今医経済之書不為不多。然所説未処至的當稗於後済。為万分之業。衒談巷議。而或乃至理所投要渉世在於

焉耳。書之弊也。或流於楷或諂於瑕。未告道之流俗。或乖好尚于差若以為人情必畧遂生乖好。自家之説於世者。隨時勢而為之訓。世訓最



易密此。其書之徴老壮少富貴而化之實也。邇來彩井氏白猶子。来東寓於大坂。嘗選此書。追來圖生博之壽。而将上之于世介紹

山田氏請跋於貫。貫以艾未通則人。我読是書則甚君人也可知也。況山田氏於亭草角身之蓄。可尽見家業者。遂題一語于其

尾張云

寶暦癸酉二月穀旦

穂積以貫　謹跋

寶暦癸酉冬十二月

書林

大坂高麗橋壹丁目
吹田屋多四郎

同
淡路町心斎橋角
安井嘉兵衛

同